

## ニーチェの教育観(一)

舟越 清

### 一、ニーチェとドイツ帝国

ニーチェは一八七一年の暮、バールゼルで『悲劇の誕生』の前書きを書いているが、その前書きの中でこの書の読者に対して「われわれがこの書の中でなんと深刻に(今日の)ドイツの問題と取り組んでいるかを見極めて、驚嘆してもらえたら、幸いである。それと言うのも、この問題は本書の中で真に本質的にドイツの希望のまった中に、うずと転回点として提出されているからである」と言<sup>(1)</sup>って、『悲劇の誕生』の執筆意図が今日の「ドイツの問題」というニ

ーチェの生きた時代に生起していた時代思潮に基づいていることを示唆している。

ニーチェは一八八六年八月、スイス東部の風光明媚な避暑地、オーバーエンガディーンのジルス・マリアに滞在して、『悲劇の誕生』を回顧して、「自己批判の試み」を書いているが、その中で「わたくしが当時捕えることができず、恐るべきものであり、危険なものであり、……要するに、ひとつの新しい問題、今日に言えは、それは科学(Wissenschaft)の問題そのものであった」と言<sup>(2)</sup>って、ニーチェが『悲劇の誕生』執筆当時深い関心をよせていた、今日の「ドイツの問題」が「ひとつの新しい問題、

……科学の問題そのもの」であったことが示されている。

ニーチェがこうして深い関心をよせた十九世紀中葉以後の科学、つまり、自然科学と技術は目を見張るほどの発展を見たが、その発展は必然的に人間の内的世界の構造に變化をもたらした。その内的世界の構造の變化とは、それまで現象世界の創造の本質として神が想定されていたところに人間によって合理的に思考され、計量計算され、その結果を数式で表わされた、さまざまな法則の働く、精巧なメカニズムがすえられたことである。そして、それを推進した原動力は現象世界に生起する一切の現象を現象世界それ自体に内在するものから説明しようとする人間の志向性にはかならない。

こうした傾向は単に自然科学や技術の領域に留まらず、社会や経済、政治、軍事、更に芸術や宗教という精神領域に至るまで広範囲に變革を迫ることになった。時代はまさに「ドイツの希望のまったなかに」あったわけであるが、その「ドイツの希望のまったなかに」ニーチェはそれとは別種のものを見出し、その「ドイツの希望」に疑問を感じ、批判することになる。一例をあげてみよう。

〔わたしがこの『悲劇の誕生』を書いた〕時代の、ほんの少し前までは、ドイツ精神が、なお、ヨーロッパ全体を支配しようとする意志を、ヨーロッパを指導しようという力を持っていたが、今や、そのドイツ精神は究極的決定的に退き、帝国の建設という、こけおどしの口実のもとに、凡庸化へ、民主主義と『近代理念』へ移行した。〕

ニーチェが『悲劇の誕生』を書いた時代は、普仏戦争に勝って、ドイツ人一般の宿願であったドイツ統一を為し遂げた時代（一八七一年一月十八日）であった。普仏戦争におけるプロシヤの勝利の最大の原因は、プロシヤ軍人の勇猛さもさることながら、科学や技術の徹底利用とビスマルクの優れた外交政策にあった。対仏講和を見る前にプロシヤを中心にしたドイツ帝国がパリ郊外のヴェルサイユ宮殿でドイツ諸邦の領主、君主列席のうちに誕生した。その時のドイツ人の歓喜の歓声は当時の資料のいたるところに聞かれる。その一例をここに示そう。

「ひとりの皇帝が自らの玉座を強固にしようとして、

突き進み、ドイツにひとりの皇帝を与えられた。しかも、ホールの壁面にはフランスのかつての勝利の栄光がほのかに輝くさまざまな色彩の中であでやかな姿をみせていたが、そのきらきらと輝くホールのそこで、厳かに新たな位が承認され、告示された。

完璧で調和がとれていて、明白に決定されているものがこの偉大な現実には、理想的な境遇という性格を与えている。……理想的な情況が、そういうことをお許し願いたい、現われ、制約された人間生活は、その理想的な境遇に近づいた。かつてばらばらにされていたものが、ひとつにまとめられたのだから」<sup>(5)</sup>

この文は、小説家で抒情詩人であり、文学史家、美学の当時の指導的な理論家の一人であった、チュービンゲン大学教授、フリードリヒ・テオドア・フィッシャー（一八〇七—一八八七）が書いたものである。当時の知識人の代表の一人であるが、その彼すら、ドイツ帝国の誕生を、神のイデーにしたがって現出したもののように受け取っている。ドイツ統一に寄せる当時のドイツ人の期待の大きさがわかる。

ニーチェは、このように、ドイツ人を心底しびれさせた普仏戦争での勝利とその結果としてのドイツ帝国誕生そのものに、ニーチェが愛して止まなかった「ドイツ精神」を、つまり、「ほんの少し前までヨーロッパ全体を支配しようとする意志を、ヨーロッパを指導しようという力を持つていた」、「ドイツ精神」を衰退させ、「凡庸化へ、民主主義と『近代理念』へ移行」させるものを見出した。ニーチェは『反時代的考察』の第一章でも普仏戦争での勝利に酔うドイツ人の本性にニーチェがこよなく愛した「ドイツ精神」が「絶滅」しかけているのを警告している。ニーチェはビスマルク主導によるドイツ帝国建設とその後の展開の中にドイツ文化を創造してきた「ドイツ精神」を消滅させるものを見出し、それを今日の「ドイツの問題」とし、その問題の根底に「科学の問題」があるのを認識したのである。

## 二、ビスマルク時代とドイツ産業界の発展

ビスマルクと彼によって建設されたドイツ帝国成立を境いにして、ドイツ人の内的世界が変化したと見る見解は、

なにも、ニーチエにのみ限られたものではない。ニーチエと時代を同じくする人や、やや後の人々に共通した見解である。いくつか例をあげてみよう。

「詩人や思想家の国民にとって、政治は本来縁遠いものであり、共感するところの少ないものであった。ビスマルクがドイツの国民感情をはじめ作り変え、ビスマルクの路線にむりやり押し込んだように思える。」<sup>(7)</sup>

「一八六二年以来制止しがたく、しかも、年々歳々より決定的に文学の様相を変えたものは、現実的な条件、つまり、政治経済関係の変化であった。

国民の政治的経済的生活におけるこの変化を指摘するには、たった一人の名前をあげれば、十分である。それはビスマルクである。」<sup>(8)</sup>

このように、ビスマルクと彼の主導するドイツ帝国成立を境いにして、ドイツ人の内的世界は、大きく変化した。その内的世界の様相を変えたものは、当時の「政治経済関係の変化」であり、その変化を推進したものは、自然

科学と技術の発展に基礎づけられた、ドイツ産業界の躍進にはかならない。その軌跡は当時の産業界の発展に例として見る事ができる。

まず、最初にビスマルク時代の銑鉄生産高を見ると、一八七〇年は一二六万一〇〇〇トン、一八七五年は一七五万九〇〇〇トン、一八八〇年は二四六万八〇〇〇トン、一八八五年は三二六万八〇〇〇トン、一八九〇年は四一〇万トンと飛躍的に増大している。<sup>(9)</sup>粗鋼の生産量は一八七〇年には一二万六〇〇〇トン、一八七五年には一二〇万三〇〇〇トン、一八九〇年には二一三万五〇〇〇トンと激増している。<sup>(10)</sup>こうした高水準の生産をもたらしたのは、長い年月にわたる製鉄技術のたゆまぬ開発にあった。その経緯は古く、十八世紀の末にさかのぼる。

「近代製鉄工業の理論的な基礎を形成したものは、ラボアジエの燃焼理論であって、その理論が溶鉱炉や精錬炉における(変化の)過程をはじめて解明した。」<sup>(11)</sup>C・J・B・カルステンスはラボアジエの理論に基づき、一八一四年に鉄の中で炭素が化学的に結合したり、結合しなかったりする作用を発見して、良質の鉄の生産に寄与した。更に、コークスによる高炉の発明は従来の木炭による鉄の生産と比

べると、銑鉄を大量に安価に生産することになって、ドイツの鉄生産の発展に貢献した。一八五五年にイギリス人のサー・ヘンリー・ベッセマー（一八二一—一八九八）によって開発された、ベッセマー法は、炭素を燃焼させるのに必要な空気を強圧で溶融した鉄の中に吹き込む方法で、この方法によって銑鉄から鋼鉄や錬鉄を加工する過程に要する時間は、バドル法の場合に要する時間、一日半を、たった二〇分に短縮し、「鋼や錬鉄の調製は労働者の熟練とかかわりがなくなつて、製鋼過程は工場長の見解のもとに置かれることになつた。」<sup>(12)</sup>ベッセマー法を改良して、多量のリンを含有している鉄鉱石でも製鉄の原料にできるようにした人は、イギリス人のシドニー・ギルクリスト・トーマスで、一八七六年から一八七七年にかけて開発されたこの方法は、彼の名をとつてトーマス法と名づけられた。ドイツが産出する鉄鉱石は、もともと多量のリンを含有しているで、トーマス法による脱リン装置が開発される以前は良質の鉄鋼を作るのに適さなかつた。この意味でトーマス法はドイツの製鉄産業に計り知れない利益をもたらした。トーマス法はドイツの製鉄工業にすみやかに取り入れられ、十九世紀の末頃にはドイツ製鋼業にあっては中心的位置を占

めるようになった。

こう見ると、ラボアジエの燃焼理論の確立とC・J・B・カルテンスの鉄の中の炭素の結合関係の発見、それらの諸法則に基礎を置くコークス炉の發明、更に、ベッセマー法、マルティン・シーメンズ法やトーマス法の發明がドイツの鉄鋼産業の発展に大いに貢献したことがわかる。科学や技術の進歩なくしては、ドイツの製鉄工業の進展は考えられない。

こうした鉄鋼生産の増大は製鉄に不可欠の石炭の生産を促した。

鉄鋼生産の伸びと並行して鉄道建設も急激な展開をみせている。ドイツの鉄道は一八三五年ニュルンベルク—フュルト間に六キロメートル敷設されたのに始まるが、それが一八七〇年には早くも一万八八七六キロメートルに、一八七五年になると、二万七九七〇キロメートル、一八八〇年には三万三三八キロメートル、一八八五年では三万七五七一キロメートル、一八九〇年は四万二八六九キロメートルと驚異的に営業キロ数を伸ばしている。<sup>(13)</sup>もっとも、これは軍事上の必要性と深く関係しているが。

農業生産をみると、J・フォン・リービヒ（一八〇五—一

八七三)による一連の学問的成果によって農業生産は著しく増大した。一八四九年と一八七一年、一八八七年の作付面積と生産量を比較すると、小麦の場合、一八四九年は一七六万六〇〇ヘクタール、一八七一年は二二七万ヘクタール、一八八七年は二二九万一〇〇〇ヘクタール<sup>(14)</sup>であり、これに対する小麦の生産量は一八四九年では一九〇万二〇〇〇トン、一八七一年では二五四万四〇〇〇トン、一八八七年では三七四万六〇〇〇トン<sup>(15)</sup>である。各年度の作付面積一ヘクタール当りの収穫量は一八四九年では一・〇七トン、一八七一年では一・一七トン、一八八七年では一・六トンとなっている。気候条件を加味しても、一ヘクタール当りの生産量は年々増しており、一八八七年は一八四九年より四ないし五割の増収となっている。化学肥料の生産量を考慮に入れると、リービヒによる学問的成果が農業生産の増大に大きな役割を果していたと見られる。

産業界における蒸気機関の導入は、一八三七年ではプロイセンでは四二一台でその総出力は七五〇七馬力であったが、ドイツ帝国成立後の一八七九年ではプロイセンで二万九八九五台で、その総出力は八八万七七八四馬力、一九〇一年では七五九五台で、その総出力は三七〇万九六六二馬

力であった。「出力は、したがって、一八七九年から一九〇一年の二二年間で三倍になっているが、他方では一台の蒸気機関の平均的な出力は三〇馬力から四九馬力に上っている。(二八三七年と一八四六年ではそれぞれ一台当り一八馬力ないし一九馬力であった。)<sup>(16)</sup>」一台当りの出力の増大した蒸気機関の使用分野を見ると、それは広い。最大の需要先は採鉱と冶金分野であった。次に繊維工業や紡績工業、織物工場、毛織物工業が大口の需要先であった。その他、食品工業、甜菜糖工業、ビール醸造工業、蒸留酒製造所、製粉工場、レンガ製造工場、土管製造工場、木工場、製材所、製紙工場、更に機械製造工業など、産業界の広い分野で使用され、著しい生産高をあげている。動力源としての蒸気機関の技術は、やがて、作業機械や工作機械の分野にも利用され、人間の数千倍の仕事をするようになった。技術的な発明発見がドイツの産業界の生産増大を促したといえる。

その他の分野での科学・技術上の数多くの発明発見は、織物工業や染色を含めた化学工業、電機工業、運輸、電信電話等、すべての分野でドイツ産業界を確実に発展させたのである。

こうしたドイツ産業界の発展は、商業分野、例えば、商

社、銀行等の分野で新しい展開をみせている。ビスマルクの活動した時代はドイツ産業界が大発展を遂げた時代であり、その発展を支えたものは、科学・技術上の数々の発明発見にはかならない。そして、それはその荷い手であった大学や高等学術研究機関を改革させずにはおかなかったのである。

### 三、ドイツ産業界の発展とその研究体制の變化

ドイツ産業界の発展にかくも貢献した自然科学や技術の研究の中心は、主として大学などの高等学術研究機関であった。当時大学と言えば、一般に総合大学(Universität)を指すのであって、工業大学(Technische Hochschule)はその頃高等学術研究機関たり得なかつた。ビスマルク時代以前に設立されていた工業大学は、今日の日本の工專のようなもので、実務に携わる技術者養成を教育の方針にしていたが、一八七〇年から一八九〇年にかけての改革で工業大学でも高等学術研究機関として機能し得るようになった。総合大学においてもこの時期に哲学部から自然科学や数学

部門が分離独立して新学部を構成し、農業研究の部門が農学部として新たに設立されたのも、この時期であった。あるいは、医学部が各地の大学に新設されたりした。

一方、大企業の出現で商品の流通分野が複雑多岐化して、その分野の専門的知識を持った担い手が必要となった。こうした社会的な要望に添って、世紀末の頃に商科大學(Handelshochschule)が各地に相次いで設立された。例えば、ライプツィヒには一八九八年に、ケルンやフランクフルト・アム・マインには一九〇一年に、ベルリンには一九〇六年に、マンハイムには一九〇七年に商科大學がそれぞれ設立されて、主として経営学(Betriebswirtschaftslehre)が講じられた。

各種の科学部門の学会は、すでに、十八世紀に設立されたものもあったが、十九世紀中葉以後になると、政府の援助のもとでビッグ・プロジェクトを手がけるように改組された。各種の科学関係の学会も科学や技術の開発を行なえるような研究機関になったのである。自然科学や技術に対する時代の欲求は、一九一一年にカイザー・ヴィルヘルム協会(Kaiser-Wilhelm Gesellschaft)の設立を見るが、これは高名な新教の神学者であり、歴史家としても有名なアド

ルフ・フォン・ハルナック（一八五〇—一九二〇）や炭水化物の構造の研究で世界にその名を知られた化学者、エミール・フィッシャー（一八五二—一九一九）の提唱に答えて、ドイツの工業界と農業界が科学や技術の振興の為に約一千万金マルクを集めて、その集められた基金の利子で研究財団の運営が賄われた。当時の皇帝、ヴィルヘルム二世の援助もあって、皇帝の名を冠してカイザー・ヴィルヘルム協会と称された。今日では現代物理学の祖として世界的な物理学者であった、マックス・プランク（一八五八—一九四七）の名を借りて、マックス・プランク協会（Max Planck Gesellschaft）と改名されている。こう見ると、ビスマルク時代よりドイツの学術研究機関は官民合わせての援助のもとで改革され、科学や技術の開発に取り組み、その果実はドイツの産業界の発展に計り知れない貢献をしたのである。

大学や各種の学術研究機関のこうした一連の改革は、大学の伝統的なあり方に変化をもたらした。医学部や法学部、新旧両教の神学部や哲学部等の旧来の学部の他に、経済学部や農学部などの専門分化した新しい学部学科の増新設が相次いで行なわれ、研究活動が多岐にわたると同時に、研究活動のあり方に差異が生じた。その結果、大学全

体を統括してきた大学の理念そのものにも変化が生じるようになった。その象徴的出来事がドイツの大学の理念を常に体現しつづけてきた哲学部（Philosophische Fakultät）の、精神分野の哲学部（日本の文学部にあたる）と数学や自然科学分野の学部（日本の理学部にあたる）への解体であった。

従来のドイツの大学の理念は、クリスチアン・ヴォルフ（一六七九—一七五四）からエマヌエル・カント（一七二四—一八〇四）を経て、フリードリヒ・エルンスト・ダニエル・シュライエルマツヒア（一七六八—一八三四）において確立されたが、その大学の理念の根底には理性が置かれ、その理性の下に知識の全領域を有機的に統一することにドイツの大学の理念の本質があった。その大学の理念を体現してきたものが、精神分野の諸領域と数学や自然科学の諸領域を包含して、諸知識の有機的統一を追求してきた哲学部であった。十九世紀に入ると、数学や自然科学は、哲学部の基底に設定された理性の領域に入り込み、その領域を数量的把握による分析とその結果の数学的形式による表現で究極的に解き明して、その領域に設定された理性の存在と理性的作用を消滅させてしまった。哲学部の解体は自然科学や技術の発展の必然の結果にほかならない。



これによって理性の下に知識の全領域を追求し、諸学問を有機的に統一するという、学問共同体としての総合大学の伝統的な理念は消滅した。哲学部の解体をもってドイツの大学はその本質において変質したのである。

#### 四、十九世紀後半にみるドイツの中等教育の変化

学術研究教育機関における科学・技術の振興に果す役割が大きくなればなるほど、その前期教育機関である中等教育を大学等の学術研究教育機関での活動に適するように変革を迫るのは、洋の東西を問わず、世の一般的な傾向である。十九世紀中葉以後のドイツにおいても、その例外ではなく、中等教育全般にわたって見直しの気運が高まってきた。

見直しの気運が生じた十九世紀中葉までは大学へ進学できる学生は、原則として、ギリシャ語・ラテン語教育を基盤にした伝統的な九年制の文科系大学進学校 (Humanistisches Gymnasium, Gelehrte Schule と呼ばれていた) の卒業生に限られていた。

この教育制度を確立した人は、「教育長官、外交官、言語学者であり、ゲーテ、シラーに次ぐ『第三番目』の古典期を代表する人物」<sup>[17]</sup>と称されたヴィルヘルム・フォン・フンボルト (一七六七—一八三五) であった。

フンボルトが確立した教育制度では、彼の教育理念に基づいて、大学進学校のカリキュラムではギリシャ語・ラテン語の授業が中心にすえられている。

次頁の表<sup>[18]</sup>が示すように、九学年の一週間の総授業時間数二八二時間のうち、ギリシャ語・ラテン語の占める時間は、一二八時間、つまり、総授業時間の五割弱を占めている。それに対して、フランス語は一二時間、数学は二五時間、物理学は八時間など、ギリシャ語・ラテン語以外の自然科学・技術系の授業時間数は六分の一ぐらいしか占めていない。ユストッフ・フォン・リービヒはこうした教育を「われわれ(ドイツ人)の場合、人文系の(大学進学校での)勉学は、精神を育成する為の手段であるばかりではない。諸言語(の習得)はわれわれ(ドイツ人)以前に生存していた、崇高な諸精神の思想に近づく手段であるばかりではない。それは、われわれとわれわれの人類にとって真に役に立つように使うために、創造主がわれわれに与えた」とか

| 学年     | 科目 | 為のヘブライ語<br>神学者希望者の<br>間の総計<br>一週間の授業時 |       |      |       |       |    |       |    |      |        |     |    |    |    |     |   |
|--------|----|---------------------------------------|-------|------|-------|-------|----|-------|----|------|--------|-----|----|----|----|-----|---|
|        |    | ラテン語                                  | ギリシャ語 | ドイツ語 | フランス語 | 宗教の時間 | 数学 | 算術と幾何 | 物理 | 哲学入門 | 歴史と地理学 | 博物誌 | 図画 | 習字 | 唱歌 |     |   |
| 第1学年   |    | 10                                    |       | 4    |       | 2     |    | 4     |    |      | 3      | 2   | 2  | 3  | 2  | 32  |   |
| 第2学年   |    | 10                                    |       | 4    |       | 2     |    | 4     |    |      | 3      | 2   | 2  | 3  | 2  | 32  |   |
| 第3学年   |    | 10                                    | 6     | 2    |       | 2     | 3  |       |    | 2    | 2      | 2   | 1  | 2  | 2  | 32  |   |
| 第4・5学年 |    | 10                                    | 6     | 2    | 2     | 2     | 3  |       |    | 3    | 2      |     |    | 2  |    | 32  |   |
| 第6・7学年 |    | 10                                    | 6     | 2    | 2     | 2     | 4  |       | 2  | 3    |        |     |    |    |    | 32  | 2 |
| 第8・9学年 |    | 8                                     | 6     | 2    | 2     | 2     | 4  |       | 2  | 2    | 2      |     |    |    |    | 30  | 2 |
| 総計     |    | 86                                    | 42    | 22   | 12    | 18    | 25 | 8     | 8  | 4    | 24     | 10  | 6  | 7  | 10 | 282 |   |

つて考えられた自然界の) 諸力 (について知ること) の無関心と知識の欠如から生じた、精神の活動の全く特別な対象で「<sup>(19)</sup>すらあった」と評している。

こうしたカリキュラムの編成を持つ人文系の大学進学校のあり方は、自然科学者や技術者、あるいは、医学者の目には人文分野の人間の育成を重視する教育と映り、自然科学・技術分野の教育の軽視と解された。その結果、伝統的な大学進学校とは別に、自然科学系やフランス語、英語、あるいは、ドイツ語などの科目を重視する大学進学校の設立を望む声が増しに強まった。

こうした自然科学者や医学者や技術系や実務畑の人々の要望にナシヨナリズムの潮流が加わった。

「一八七〇年人々が熱望していた理想が現実になった。人々は皇帝と帝国を持った。今、人々は自らのナシヨナル感情の為に新たな活動領域を求めた。そして、その中のひとつが学校 (制度) であった。ラテン語やギリシャ語で教育された青年は一八七〇年までナシヨナルを感じず、一八一三年と一八一四年と同じように一八七〇年でも自らの義務をまるで行なっていないかの

ように見られた。人々は外国文学や外国の歴史に力をさく代りに、言語においてはより多くドイツ語を、歴史の教科にはもっぱら『祖国史』と、なかんずく、近代史をも要望した。<sup>(20)</sup>」

こうした国粹主義は古代古典文化が、静かな偉大さの中でゲーテ・シラー時代以来長らくドイツ人に真の愛国心を目覚ませ、青少年の人格形成や市民的社会的教育に大いに貢献したことに、はなはだ無理解であった。

その上、当時の古典文献学者の中には、とるにたらぬことに血道をあげたりしていた人もいて、古代古典文化に対する社会の評価が著しく低下した。かてて加えて、ボン大学の古典文献学で一八七〇年代に生じた不幸な出来事、つまり、当時の高名な古典文献学者であった、フリードリヒ・リチュル教授（一八〇六一—一八七六）とオットー・ヤーソ教授（一八一三—一八六九）との間にみられた争いは、古典古代文化を中等教育の教養科目の中心に置くことに大きな疑念を生じさせた。ドイツの中等教育の中核にすえられた古典古代も自然科学や医学、あるいは、技術上の目も覚めるような数々の成果と古典文献学界の内部に見られる荒

廢とあいまって、その地位を少しづつ変えざるを得なかった。

古代古典研究の揺り籠的役割を荷っていた文科系大学進学校での教育のあり方は、あらゆる方面から非難され、中等教育制度すべてが吟味の対象にされた。さながら、カオースの状態であった。こうした状態を取捨しようとして、一八九〇年十二月にベルリンで学校教育会議（Schulkonferenz）が、まるで、ドイツの教育制度に対する救済策がそこから生じるかのような国民の期待のうちに召集されたが、結果は、いろいろな事情から現状維持が新型の大学進学校の大学入学資格の認知より重視されたし、最重要議題はプロイセンに学校管理をゆだねることであった。一八九二年にこのベルリン会議での議決したことが、新カリキュラムの中で現実化されたが、それは誰も満足させるものではなかった。急進的な変革を望むものにとつては、最も重要であった数学や自然科学や外国語教育を強化した新型の九年制の大学進学校の評価は、十分なものではなかったし、保守的な文科系の大学進学校で教育を受けた人々にとつては、はなはだ許し難い内容のものであった。両者のうちの一方だけの学校改革が持続するなど信じる人は一人と

してはなかつたし、教育界に創造的な構想力と行動力とを  
持った役人はほとんどいなかった。再度の教育改革の波紋  
は接近しつつあった。

時代は自然科学と技術を中心にしてドイツ工業界が躍進  
していた時代であった。人文系の教育だけでは時代の傾向  
に対応できる状況ではなかつた。こうして、複雑な経緯を  
経て生まれた新型の大学進学校、九年制の「実科大学進学  
校」(Realgymnasium)は認知されて行くのであった。

かくして、十九世紀の末までにはドイツの主要な中等教  
育には九年制の大学進学校が二種実在することになった。  
つまり、伝統的な文科系の大学進学校と自然科学や技術系  
や外国語教育を重視する大学進学校がそれである。こうし  
た教育界の動きをドイツ人全体の人間形成と文化創造とい  
う観点から把握した人は、当時、あまりいなかった。ニー  
チェはそういう捕え方をした数少ない人間の一人であつ  
た。ニーチェが見た当時のドイツ教育界の現実とその分析  
の一例を示そう。

「われわれが関心を寄せざるを得ないことは、このド  
イツの諸施設の将来、つまり、ドイツの小学校、ドイ

ツの実科大学校、ドイツの大学進学校、ドイツの総合大  
学の将来である。……とまれ、それらはわれわれの教  
育諸施設であり、その諸施設はわれわれと偶然に関係  
を持つていてのではない。……重要な文化運動の生き  
た記念碑として、形成されたもののいくつかにあつて  
は、『先祖(伝来)の家具』そのものとして、われわれ  
の教育諸施設は、われわれを民族の過去と結びつけて  
いる。……わたくしにとつてはっきりしていること  
は、『現代風に』する為には、現代が我が教育施設に敢  
えて行なつてゐる、数々の変革が、大部分でその設立  
の本来の崇高な意図から離れた線にあつたり、逸脱す  
るばかりであるということである。われわれがこの点  
で将来に敢えて希望することは、ドイツ精神がはなは  
だ全般的に変身して新鮮になつて、純化することであ  
つて、その精神からこの諸施設もある程度新しく生ま  
れ変わり、それから、この新生を経た後で、古くて同  
時に新しい姿を現わすということである。しかるに、  
われわれの教育諸施設は、現在、極めて多くのところ  
で、いたずらに『近代化』や『現代風』であろうとし  
てゐる。』

ニーチェは「ドイツ精神」の復活を基底にした、ドイツ文化の創造を念頭に置きながら、ドイツの教育とその諸施設の将来のあり方を論じ、教育のあるべき姿を追求している。ニーチェの行った教育観を、ニーチェの著作である『教育者としてのシヨヴァン・ソヴァン』と『われわれの教育施設の将来について』を中心として、なせる限りウヰウヰットに描き出さうと思つ次第である。

注

- (1) Friedrich Nietzsche: Die Geburt der Tragödie. In: Nietzsche Werke. Kritische Gesamtausgabe. Hrg. von Giorgio Colli undazzino Montinari. Berlin. (Zweite Nietzsche Werke. Kritische Gesamtausgabe. Dritte Abteilung. Erster Band, 1972. S. 19 ff.
- (2) Ebdenda, S. 7.
- (3) 拙論「ニーチェと十九世紀のドイツの状況」。ヨーロッパ文化研究第三集、一九八三年、九九—一四一頁。同、同第四集、一九八四年、七九—一〇一頁。
- (4) Friedrich Nietzsche: Die Geburt der Tragödie. In: Nietzsche Werke. Kritische Gesamtausgabe. Dritte Abteilung, Erster Band, 1972. S. 14.

- (5) Friedrich Theodor Vischer: Der Krieg und die Künfte. In: Friedrich Theodor Vischers Ausgewählte Werke. Dritter Band. Prosaschriften. Hrg. von Dr. Gustav Keyßner. Stuttgart und Berlin, 1918. S. 508.
- (6) Friedrich Nietzsche: Unzeitgemässe Betrachtungen. Erster Stück: David Strauß. In: Nietzsche Werke. Kritische Gesamtausgabe. Dritte Abteilung, Erster Band, 1972. S. 155 ff.
- (7) Theodor Ziegler: Die geistigen und sozialen Strömungen des Neunzehnten Jahrhunderts. Berlin. S. 398.
- (8) Friedrich Kummer: Deutsche Literaturgeschichte des 19. Jahrhunderts. Dresden. 1909. S. 442.
- (9) B・R・ミッチェル編(中村宏譯)「マックス・ウェーバーの歴史統計(上)」ヨーロッパ篇(一七五〇—一九七五)『四一四頁』。
- (10) 同右、四二〇頁。
- (11) Werner Sombart: Die deutsche Volkswirtschaft im Neunzehnten Jahrhundert. Berlin. 1909. S. 166 ff.
- (12) Ebdenda, S. 168.
- (13) 前田(6)『六〇六頁』。

- (14) 同右、二一四ページ。
- (15) 同右、二五六ページ。
- (16) Werner Sombart: Die deutsche Volkswirtschaft im Neunzehnten Jahrhundert. Berlin. 1909. S. 163.
- (17) Peter Berglar: Wilhelm von Humboldt. rowohlts monographien, 161. S. 8.
- (18) Hermann Bender: Geschichte des Gelehrtenschulwesens in Deutschland seit der Reformation. Im: Geschichte der Erziehung von Anfang an bis auf unsere Zeit. fünfter Band, Erste Abteilung. 1901. Stuttgart. S. 275.
- (19) Justus von Liebig: Ueber das Studium der Naturwissenschaften und über den Zustand der Chemie in Preussen. Im: Justus Liebig: Reden und Abhandlungen. Wiesbaden. 1965. S. 11 ff.
- (20) Theodor Ziegler: Die geistigen und sozialen Strömungen des Neunzehnten Jahrhunderts. Berlin. S. 613.
- (21) これについては、西尾幹二著・ニーチエ第一部、中央公論社、昭和五二年、三二九ページ、に詳しい。
- (22) 実科大学進学校 (Realgymnasium) は一八八二年以来、

- プロイセンで実施されていた九年制の大学進学校で、自然科学と数学、ラテン語、外国語(英語、フランス語等)の教科を主とした大学進学校であった。特にラテン語は全年年で教育され、ギリシャ語の教科はない。一九〇〇年にはギリシャ語・ラテン語の教科目が必修である人文系の九年制の大学進学校と古典語が必修でない九年制の実科大学進学校は同格になった。
- (23) Friedrich Nietzsche: Ueber die Zukunft unserer Bildungsanstalten. Im: Nietzsche Werke. Kritische Gesamtausgabe. Dritte Abteilung, Zweiter Band, 1973. S. 136 ff.